



こ
の
子
供
た
ち
(11)

イーデイス・ウオートン作
松原至大譯

二人の女性

ジュデイスは、子供たちの話になると、夢中になった。とりわけ、テリーののことを、できるだけよく説明した。それというのも、セラーズが、しっかりした人であることが、はっきりしてきたからであった——テリーと同じように。

テリーの運の悪い、もう一つのことについて、ジュデイスは細かに語った。両親にせがんで、やっと家庭教師が見つかって、万事が順調に運ぼうとしたら、ジュデイスがその教師と結婚するなどいい出した。テリーにとって、こんなひどい不運というものが、またとあるうかと言った。

もっともだと、セラーズは言った。だが、ポインはセラーズの唇の格好を見て、「不運」という名詞は、この

際使うのに当らないし、また「ひどい」という形容詞も、妥当なものではないと思っていることを見てとった。

「でも、それは、一時の気まぐれに過ぎませぬわ、おかあさまの。いくらおかあさまでも、その若い方と結婚なさって、なにもかも台なしになさることはなさいませぬまい。」

ジュデイスの目が、見開かれた。

「でも、母はどうしましょう——もし、あの人を恋しているとしたら。」

セラーズは、静かに目を閉じた。

「でも、おかあさまは、きつと、きつと、あなた方のお考えになりますよ。」

「ええ、そうなのです。もう、そうなのです。母と父は、今も私たちのことで争っています。私たちが家を出したのも、そのためです。マーティンさんは、お話しになりませんか。」

「きつとあなたのお口から、お話しになる方がよいと、お思ひになったのでしよう。あなたが、お話をさりとてお思ひになっただけを。」セラーズは、巧に言った。

ジュデイスは、額に八の字をよせた。

「ほかになにか、お話することがありませんか。私たちは、離れ離れにされるのがいやで、皆を連れてきました。お互いが気をつけあわなければ、だれが面倒を見てくれましょう。父と母は、自分たちの始末がつかないのですから、頼みになりませぬ。」

「まあ、おかわいそうに。」こう言って、セラーズは、思わすジュデイスの手をとった。

「今あなたが。しゃつた通りに、おかあさまに申し上げて御らんなさい。そうなされば、きつとおかあさまは、あなた方を、だれの手にもお渡しになりますまい。」

ジュデイスの八の字は解けて、不安そうに眉があがった。

「以前は母も、それでした。でも今は、恋をしているのですもの、どうなりましょう。恋だけは、私、したくないと思います。おまけに、じきに子供が生れるんですもの。あなたには、お子さんがごさいませんねえ。」

セラーズは、かすかにないという合図をした。

「まだ遅過ぎはしません。でもあなたが、もし私たち全部と、三人の義理の子までお持ちとしましたら、多分今度のことは、無理もないとお思になります。母は、私たちを嫌うわけではありません——ただ、心のあらしが起っているのです。お友だちのドール・ウェストウェイさんは、いつもそう言っていました。そしてあの人はこういうことを——。」

セラーズは、コーヒーをかきまわしていたスプーンをおいた。

「ドール・ウェストウェイ。」

ジュデイスの顔は輝いた。

「御存じ。」

「いいえ。」とセラーズは、きつく拒むように言った。それは、ポインにとって馴染みの深いものであったが、この少女には、気のつかない表情であった。

「その方は、私の大の仲よし、あんなかわいい人はありません。濃いばら色の海水着を着て——。」

「ねえ」と、セラーズはさえぎった。「こんなよいお天気に、お家にはつまりません。コーヒーがすみましたら、バルコニーに出てみましょう。マーティンさん。シガレット、ございます。」セラーズの優しさの中には銀の氷のようなものがあつた。ジュデイスはびっくりして、後につづいた。ポインは、一生懸命にシガレットを

配給した。「なにか、気にさわったことでもあるのかな」と思いながら。

捜索の電報

だが、座の白けたのも、ほんの少しの間であった。青いヴェールをしたナースが、血色のよい小さな男の子を連れて、バルコニーの下のスロープを登ってくるのを見ると、またもとのように、にぎやかになった。

「ああら、ここよ。ここにゐるわ」ジュデイスはうれしそうに、その二人に合図をした。セラーズは、手すりにのり出して、元気にいった。

「まあ、おかわいいこと。チップさんね。」

いかにも、ここにチップストーンが現われるようにしたのは、ジュデイスの利口なところであつた。子供のない婦人にとって、この健康と上きげんとの一かかえの見ものは、心の痛みの種であると共に、また鎮痛剤ともいえるにちがいない。セラーズの目が、笑ったり、まごついたりしているボインの目と出会つた。チップストーンは、いつもの朗らかさで、その場をいっばいに行っている。一同は、チップストーンに会いそをするために、もとの居間にはいった。たちまちセラーズの膝ののって、仏さまのように、ジュデイスや、ボインや、ナニーたちが、自分を拜むようにしているのを、うれしそうに見て笑っていた。どんなものでも、チップストンの前に出ると、あわの立つた新しいミルクのように、新鮮なものになった。

「ええ、そりゃ、チップはよい子ですわ。でも、テリーにお会い下さるまで、お待ち下さいね」ジュデイスがおどけていった。

「テリーはこれなかったの。でも、ほかのものは、みんな来てよ」とびらの外で、小さな鋭い声が聞こえた。

「まあ、ジニーじゃないの」ジュディスが、むっとしていった。とびらが、ひとりでに開いて、ジュディスの義理の妹が現われた。そのくしゃくしゃした赤毛頭の後には、パンとピーチーの黒い、おかつぱの頭が見えた。「はい、決して、私ではございません。スーザンは、決して皆さんを、こちらへよこしはしないと、私に誓ったのでございますが」付きそってきたナニーはジュディスにらまれて、こういいわけをした。

「スーザンのせいでもないわ」と、ジニーは、落ちつきはらっていった。「スーザンは、ずっと私たちの番をしていたんだけれど、私たちの足の方が早いよ。だって、スーザンは靴ずれが、できてるんですもの。それで追いかけるのをやめちゃったのよ。そうだわねえ」こういって、後を見て、「まま子たち」に、賛成を求めた。だが、この時、パンは、宙返りをして、部屋のまん中に出ていた。そこで頭を下にして、むきだしの脛と、上靴の裏を、空に見せていた。ピーチは、セラーズのそばにとんで行って、チップストンを力まかせにかかえて、「チーボー、私たち、あんたを迷い子にしてしまつて。死んじゃったんじゃないかと思った」こういって、うれし泣きをした。チップは、ばら色の笑い顔で、その詩を聞いていた。

「そうよ。ジュディスが、こゝそりきてしまつて、私たちを、おいてきぼりにしたからいけないんだわ。チップだけ連れてくるなんて、一番小さいのに、いけないじゃないの」ジニーは、セラーズに訴えた。

セラーズは、それはたしかにいけないことだけれど、みんなは食堂にはいりきれないものだから、招待しなかつたので、こんなせまい家にいる自分もいけないと答えた。「そういうわけで、チップストンさんが、皆さんの代表に選ばれたのですよ。場所をとらないから」と、上手にいいきかせた。

「ちがう、場所をとらないのは、ぼくですよ」パンが、けんか腰で、セラーズの前に出た。「ぼく、クロツケの輪だつてくぐるぜ。それから——」

「あなた方は、おしゃべりをしないではおられないのに、チップは、おとなしくしていますよ。だから私は、チップを連れてきたのよ。」ジュデイスは、パンにぎつぎつを与えながら言った。ナニーは、ピーチーがパンに同情して、泣き出しそうになるのをとめた。

「まあ、困った子供たちね。」と、戸口のところで、別の声がした。今度のは、いかにも分別のある、いかにもやさしく、とめる声だった。セラーズは、自分と同じように、騒ぐ子供にはなれないお客だと思って、急いで出むかえた。

「ほんとに、困りますね。」こういってはいってきたのは、ブランカであった。細っそりとして、白い服を着た落ちついた様子は、ジュデイスが、その妹のように思えた。

「ナニーが、チップちゃんを連れて行くのを見つけると、みんながとび出しましたと、スーザンがいうものから、私、すぐ後を追いかけてきました。でも、つかまえられませんでした。御免なさい。」息をきりながら、ジュデイスにいいわけをした。その長いまつ毛が動いて、セラーズとボインの方をうかがっていた。

「マーティンさん。」ブランカは、母親の様子の一つをそのまま真似て、ボインに会釈をした。それから「私はテリーと双子でございます。」とセラーズに説明した。

セラーズは、いつものやさしさで、テリーさんが来られないので、こんなに美しい代理の方をよこして下さって有りがたいといった。ジュデイスは、ボインを見て、ちよっといやな顔をした。ブランカは、それにもかまわず、

「あら。でも、テリーにお会い下されば、ほかのものをかまわなくなりましょう。」と真剣にいった。

「ちがうよ。おばさまは別だ。おばさまは、ぼくとピーチーが好きだよ。ぼくたち、マーマの公爵だもの。」

ジュディスがとめるのもかまわず、とんぼがえりをしそりになって、パンが、こういった。

ジニーは、パンを押しつけて、セラーズの前に出た。

「私のおかあさんは、私たちをお金で引きとろうと思えば、できるのよ。映画のスターですもの。うすっぺらな、かん高い声で続けた。「でも、私がさせないの。だって、みんな仲よしですもの。それにジュディスが、スコープの本にかけて、私たちが結婚するまでは、みんないっしよにいるようにって誓わせたのよ。私は、多分パンと結婚するでしょう。」

これを聞くと、ピーチーの顔に失望の色が見えた。だがパンは、興奮した様子をそらして言った。

「ぼくのほんとうのおかあさんは、ライオン使いだっただも、つまらない。死んでしまっただも。」

セラーズは、折を見て、気分転換を試みた。ゲーム、お茶、それからまたゲームと、目先をかえて行くその巧みさは、いつもかの女を社交上の優越者としていた。この日も夕方近くになると、眠くなつた子供たちは、満足してローゼングリユーへ帰って行った。山荘の入口で、ジニーはバルコニーの方に、

「私たちの来ることが、初めからわかっていたら、おばさまは、なにかおみやげを用意したでしょう」と、いおうとしてやめた。ジュディスのせきばらいが、それをさえぎつたのである。

一同は、急いで丘をおりた。でも、セラーズが、

「あしたもいらっしやいね」といったのは、よく聞こえていた。セラーズは、ホキータ家の小さな人たちの訪問に、お返しする翌日が、待ちきれなかった。みんなが帰つてしまふと、すぐに、本を一かかえほど集めて、ポインといっしよに出かけた。その中には、テリーが特別喜びそりなものが選ばれてあつた。(つづく)